

編集後記：先日、機会があって、「気象情報の利用に関する第2回欧州会議（ECAM）」に出席しました。会議では、研究者、予報官、テレビの予報解説者などが一同に会して、「予報のための気象予測の最先端の成果を一般利用者への情報としていかに有効に利用するか」、「情報としての価値をより高くするための天気予報の形態や提供のあり方とは？」などについて議論しました。フランス、イギリスの気象局に加え、フランス気象学会が主催し、天気予報に関係する人であれば、原則として誰でも会議に参加できました。

天気予報が気象研究の成果を利用していることは言うまでもないことです。しかし、予報となると完全に解明されていないところにも、なんらかの情報価値を見いだして、利用者に提供せざるをえない場合もあります。一方で、「何に対して一般利用者の興味があるのか」、「何に対して品質向上を求められているのか」なども、予報技術の立場からは有意義な情報と思えます。これらのことは、異なった立場の人がひとつのテーブルの上で議論することによって、より明らかになりま

すし、互いの立場の違いを認識し交流を深めることにもつながると思われま

す。ところで、日本の実情を、まず学会の側から眺めてみますと、最近では「天気」をはじめ、春夏の気象学会の発表会においても、必ずしも天気予報に直結したような応用部門の記事が多いとは思えません。しかし、気象予報士の制度などによる気象分野の裾野の広がり、予報の自由化などにより、「予報技術」が気象の分野（＋一般社会）で従来よりも注目されていることは間違いのないと思います。このような中で、「天気」としても、予報技術に携わっておられる読者にも、より興味を持たれるような編集を心がけなければいけないと思っております。

ECAM は、いわゆる華々しい研究成果が登場するという性質のものではありませんでした。ただ、私に学会と「天気予報業務に関する分野」との関わりについて、少し考える機会を与えてくれたのは間違いありません。

（牧原康隆）